

御所平遺跡・御所平北遺跡

平成21年度県営中山間総合整備事業御柱の里地区

農道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



2010

長野県富士見町教育委員会

例　　言

1 本書は平成21年度県営中山間総合整備事業御柱の里地区農道工事に伴い、諏訪地方事務所の委託を受け、富士見町教育委員会が行った御所平遺跡ならびに御所平北遺跡の発掘調査報告書である。

2 発掘調査および整理作業は以下の日程で行った。

発掘調査 2009年7月30日～9月24日

整理作業 2009年10月27日～2010年2月26日

3 発掘調査は小松隆史が担当した。また、本書の執筆、編集は小松隆史が、製図は小池敦子、小林美知子、渋井智子が行った。

4 本報告にかかる出土品、諸記録は井戸尻考古館に保管されている。

5 遺構番号は過去の調査に統いて付している。

6 調査担当者および発掘作業員・整理作業員は以下のとおり。

調査担当者 小松 隆史

発掘作業員 小林やす子 平出 文子 朝香 蝶朗 有賀 卷人 福井 恒夫

雨宮 良一 小池 敦子 小林美知子 小熊 詩音（立正大学生）

整理作業員 小林やす子 平出 文子 小池 敦子 小林美知子 渋井 智子

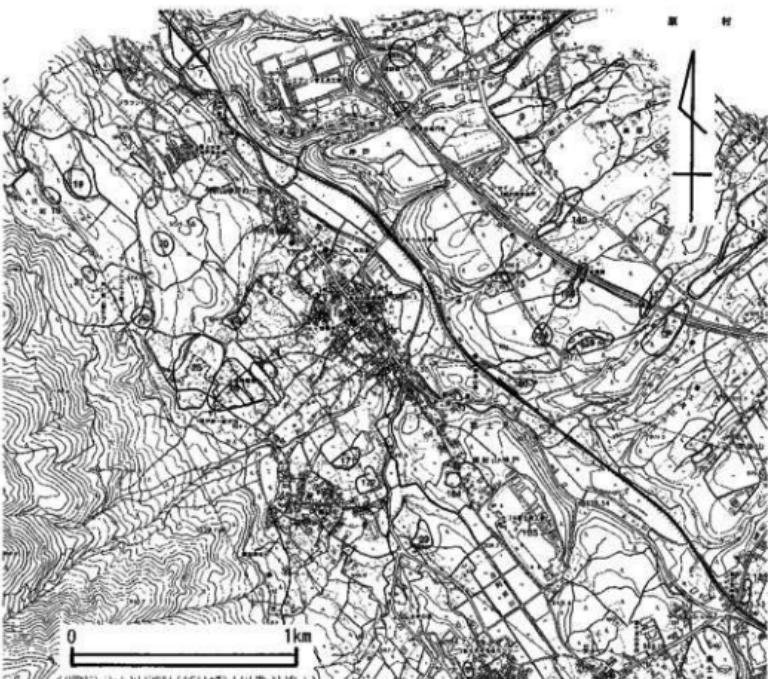
1 遺跡の環境と調査の経緯

遺跡の環境

御所平遺跡、御所平北遺跡は御射山神戸集落の南西、入笠山の東麓に位置する。このあたりは入笠山より押し出された砂疊層が堆積しており、宮川に向かって緩やかに傾斜し、眼前には広大な八ヶ岳の裾野を一望する。

遺跡のすぐ北東、山の神淵池のあたりを釜無山断層群の活断層が走っており、その影響か周囲よりやや高く、張り出した台地状の地形となっている。ここが御所“平”と言われるゆえんである。また山からは豊富な水が流れ、さらに断層のあたりには湧水が点在している。

御所という地名の由来は不明であるが、すぐ北の大郎口という地名を経て、伊那市高速の芝平集落へ通じる古道の入り口であり、平安時代後期にはすでに利用されていたと推測される。この一帯は水田や畑地として利用されており、以前より遺跡の存在は知られていた。昭和46年には道路の新設に際して最初の発掘調査が行われている。



第1図 御所平遺跡(26)・御所平北遺跡(25)(1:25,000)

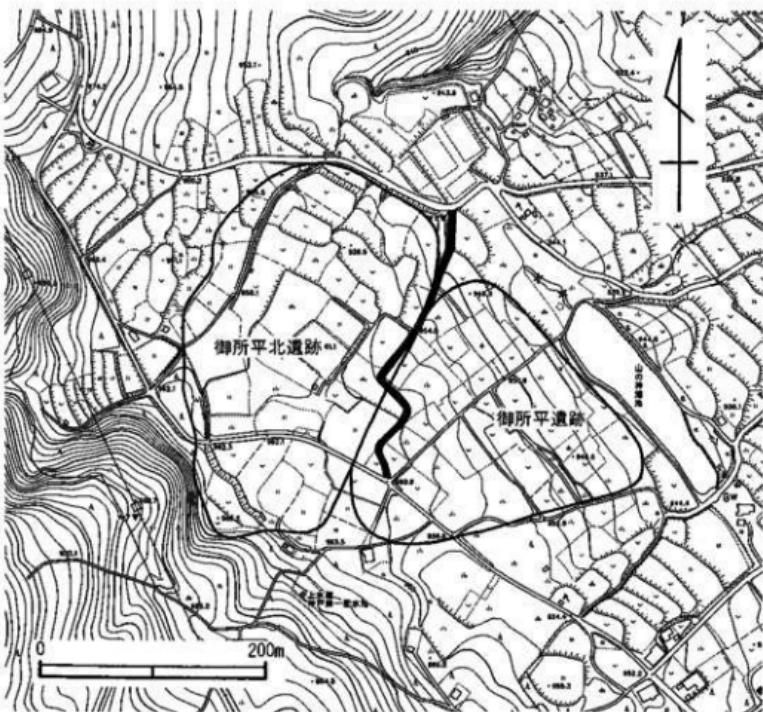
調査の経緯

平成15年には県営田園空間整備事業として昭和46年に開設された道路の舗装整備に先立つ発掘調査が行われ、つづいて県営中山間総合整備事業の一環で平成16・19年と異なる路線の整備と発掘が行われた。

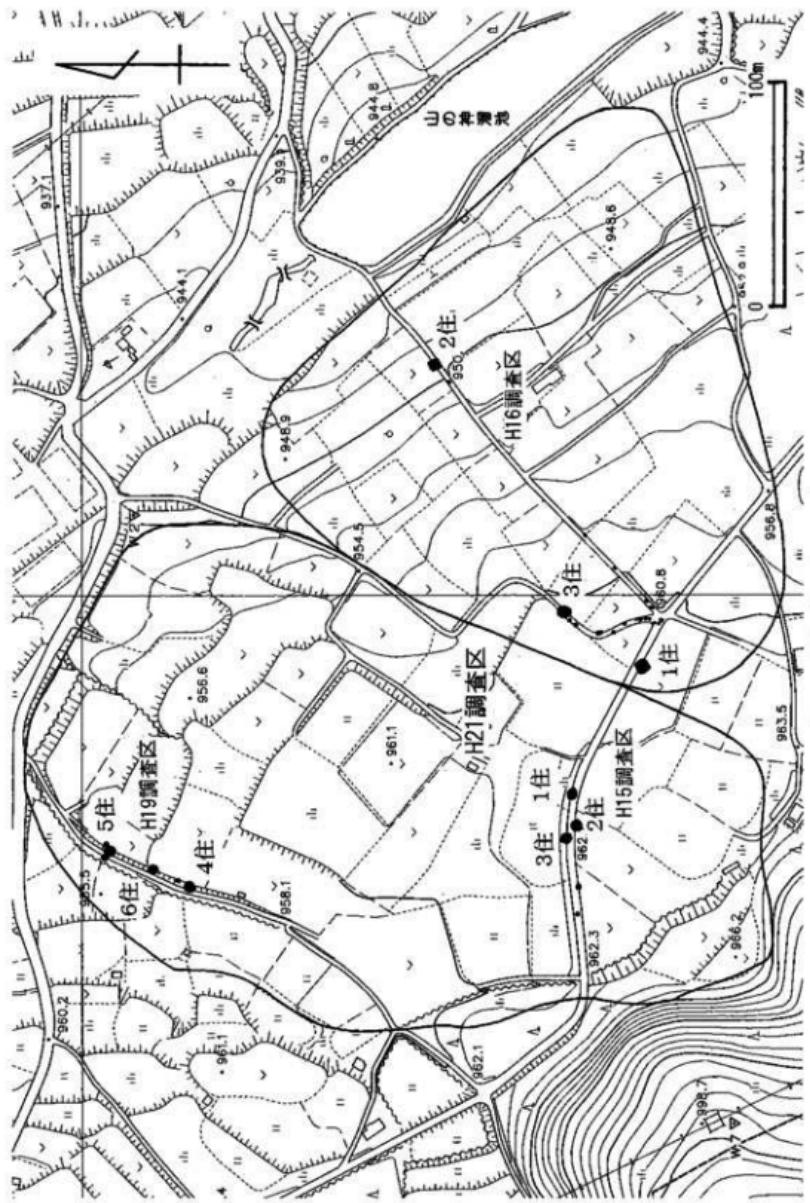
そして平成21年度事業として、両遺跡の境界付近にかかる御所平線の整備事業が計画され、県農地整備課、県教育委員会文化財保護課、町教育委員会文化財係の3者による協議の結果、記録保存を前提とした発掘調査を実施することとなった。

御所平遺跡と御所平北遺跡

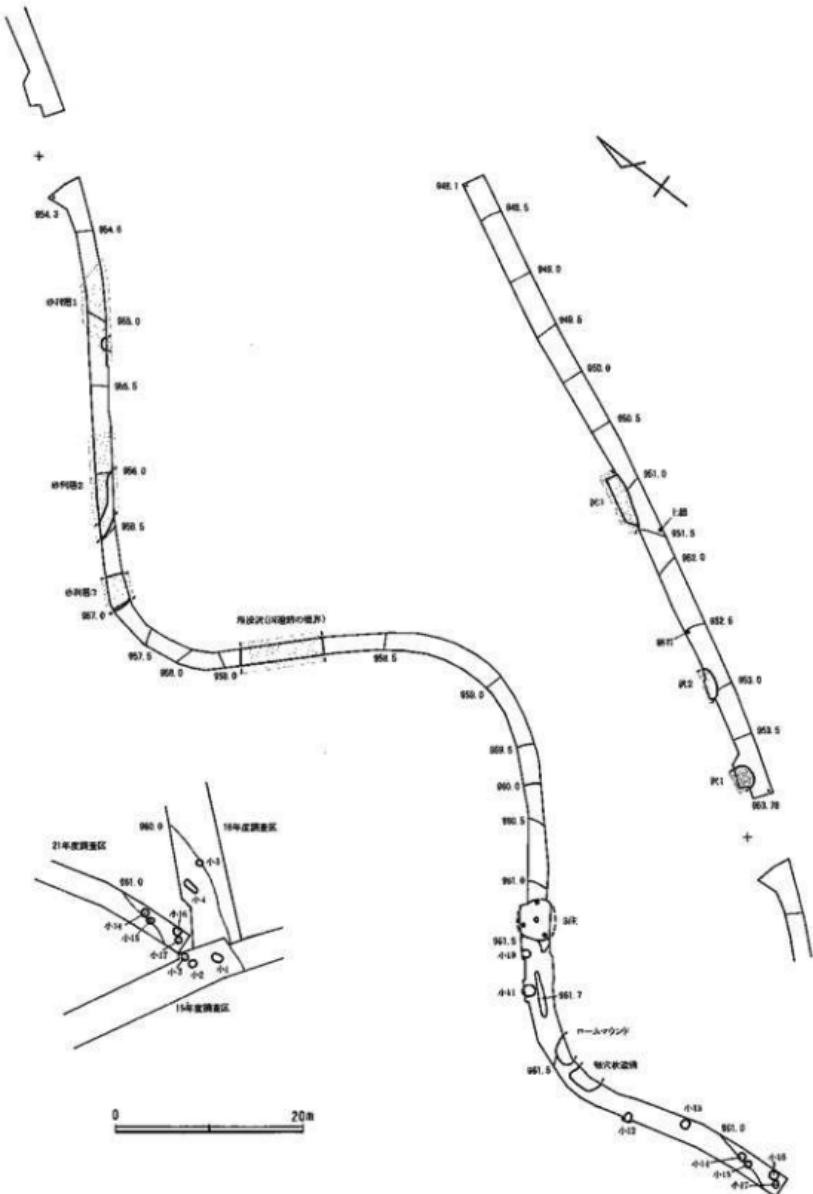
現在、両遺跡は広い台地上に隣りあっているように見えるが、もともとは幾筋かの沢に区切られていたことが、調査の結果分かっている。現在、水田や畑として利用されている下に、やや規模の大きい埋没沢があることが平成15年の調査で明らかとなり、これをもって御所平と御所平北の両遺跡を分けている。



第2図 発掘調査区 (1:5,000)



第3圖 遺構分布圖 (1:2,500)



第4図 調査区全体図 (1:600)

2 遺構と遺物

御所平遺跡

住居址

第3号住居址

今年度調査区の最高所近くにある。道の左右は田畠のために削平され、現道より低くなっているが、道が痩せ尾根の頂部を通過しており、もともと周囲より高かったことがうかがえる。

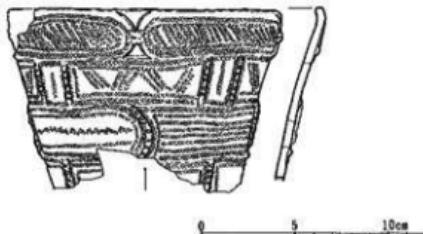
轍の間に残っている高まりの土を剥ぐと、その直下から埋甕炉が現れた。北東側は道が下つていくため、壁は失われ、床面も大きく損なわれていた。また南東と北西は整地に伴って削られていた。(第6図)

主柱は1・3・5。いずれも深く、しっかりした穴である。柱穴に近接して、貯蔵穴であろうか、2と6が見つかった。

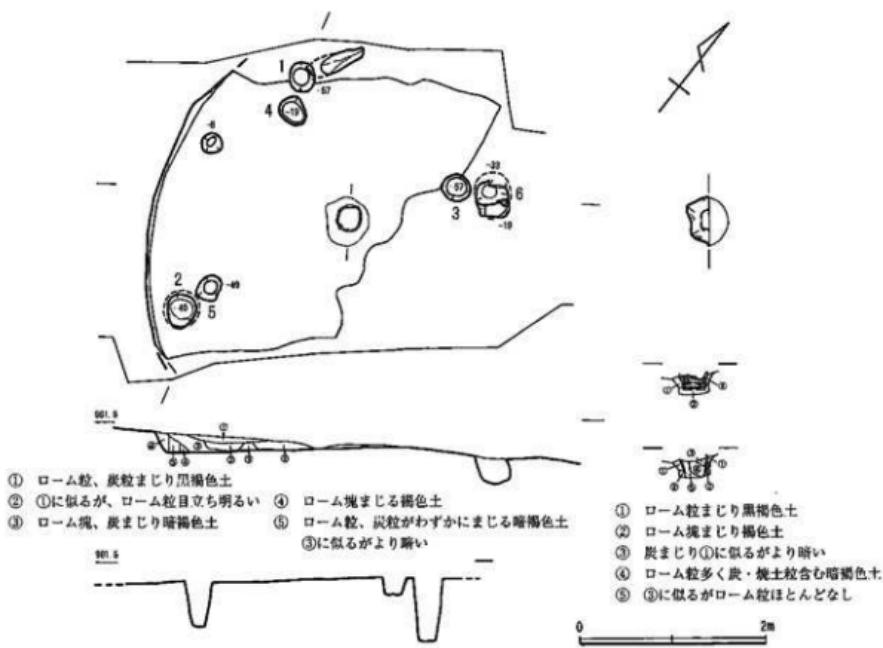
炉は新道式の深鉢の胴部より上を埋設していた。周囲の土はあまり焼けていなかったが、土器は熱を受けてもろくなっている。(第5図)

一部は床面まで削られていたため、住居の埋め土も多くが失われており、遺物も少なかった。数点の石器と、土器の細片があったのみである。(第7図)

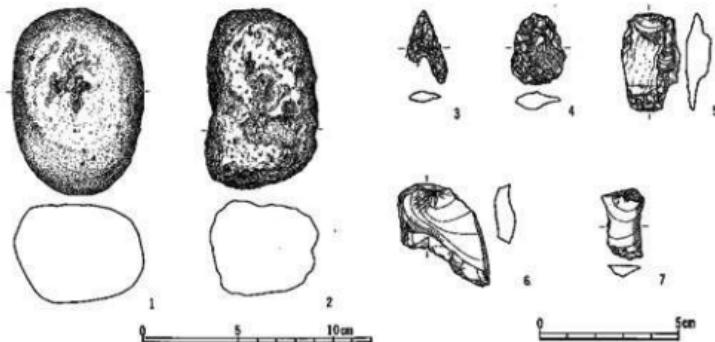
1は磨り石。磨り面に浅く不整な凹み穴がある。輝石安山岩。2は粗製の凹石で、表裏左右各面に二~三箇所の凹みが穿たれている。3は黒曜石の石錐。片脚を欠損している。4はほぼ全面に押圧刻離が施された剥片。石錐の未製品かもしれない。5は楔形石器で、6・7は微細な刃こぼれがある剥片石器。3~7はいずれも黒曜石。



第5図 第3号住居址 炉体土器 (1/6)



第6図 第3号住居址 (1:60)



第7図 第3号住居址の石器 (1・2:1/3 3~7:1/2)

小豎穴

第3号住居址の南西と、調査区南端の平成15・16年度調査区に近いあたりで、小豎穴がまとまってみつかった。とくに調査区南端近くでは、平成15・16年度にも小豎穴が調査されていたため、このあたりで小豎穴群が見つかることは当初より想定されていた。

なお小豎穴の番号は、平成15・16年度の調査において9号まで付されているため、今回は10号から付けている。(第8図)

10号小豎穴

第3号住居址のすぐ南西でみつかった。穴の北西側は開田時に削平されている。底は平らで桶状の穴。中ほどから礫が出土したが、これから上は炭が多く混じる黒褐色土。これより下はローム分が多くなり明るい色調であった。

遺物は少ない。新造式の小破片がわずかに出土したのみである。

11号小豎穴

10号の南西にあり、10号同様、北西側は開田時に削平されている。浅い盤状で、底は平ら。埋め土にはローム塊が多く含まれていた。

遺物は片手いっぱいほどしかない。曾利Ⅲ式とみられる土器の小破片が出土している。

12号小豎穴

浅い盤状の穴。底は平らだが、固くない。埋め土はロームが多く混じる、明るい色の暗褐色から褐色土でしまりはない。

遺物は全くなかった。

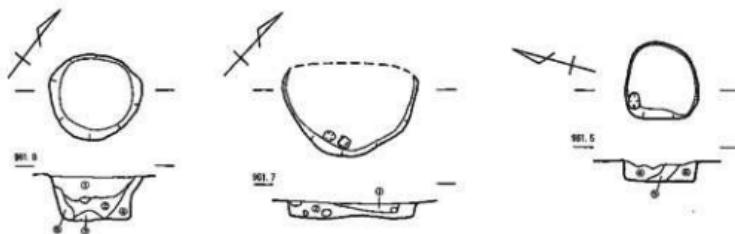
13号小豎穴

底は平らで、壁がやや開き気味に立ち上がる桶状の穴。底はしまっていて固い。炭混じりの暗褐色土で埋まっていた。

比較的多くの土器片や黒曜石の剝片、礫が出土した。井戸尻式の土器片が出土したため、現場では当該時的小豎穴と考えて調査を進めたが、整理段階ではこれはわずかで、むしろ曾利Ⅲ式の土器が主体となることがわかった。また赤彩のミニチュア土器片が2点と壺形土器の胴部片が出土している。

14号小豎穴

15号に隣接している。底は平らで壁もほぼ垂直に立ち上がる桶形の穴。一部焼の中程が外に張っている。埋め土にはローム塊が多く含まれており、短期間で埋められた様子がうかがえる。貯蔵穴のようだが、遺物はまったく出土しなかった。



10号小豊穴

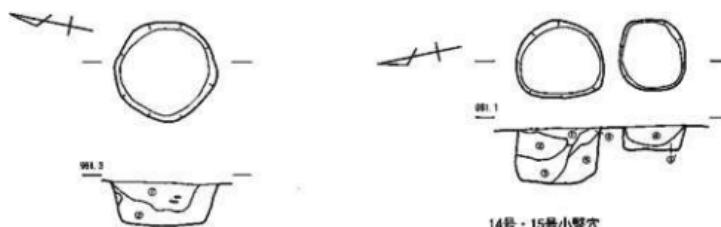
- ① ローム粒まじり黒褐色土、炭多い
- ② ローム粒まじり暗褐色土、炭多い
- ③ ローム塊まじり褐色土、縁まりない
- ④ ローム塊まじり暗褐色土
- ⑤ ローム崩れ土のようなローム質褐色土

11号小豊穴

- ① 黒褐色土
- ② ローム粒まじり暗褐色土

12号小豊穴

- ① ローム塊まじるローム質褐色土
- ② ローム粒まじり暗褐色土
- ③ ローム塊まじり暗褐色土

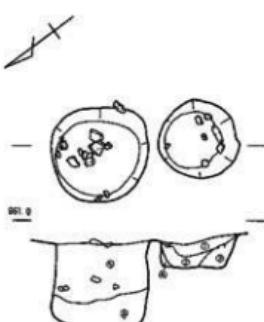


13号小豊穴

- ① ローム粒、炭含む黒褐色土
- ② 炭まじり暗褐色土

14号・15号小豊穴

- ① ローム粒わざかにまじる黒褐色土
- ② ローム塊多く含むローム質褐色土
- ③ ローム塊、炭多く含む暗褐色土
- ④ ローム塊含む暗褐色土、③より暗い
- ⑤ 桧大ローム塊含む暗褐色土
- ⑥ ③と似るが炭はほとんどない



16号・17号小豊穴

- ① ローム粒まじり暗褐色土
- ② 桧大ローム塊まじり暗褐色土
- ③ 桧大ローム塊まじり黒褐色土
- ④ 崩落ローム塊
- ⑤ 炭多く含む涅黒土、ローム粒まじる
- ⑥ ローム塊まじり黒褐色土



第8図 10号～17号小豊穴 (1:60)

15号小豎穴

14号に隣接する。底は平らで壁も垂直に近い盤状の穴。遺物は出土していない。

16号小豎穴

17号に隣接し、平成15・16年度調査区に近い所にある。上面に礫があり、その下が炭を多く含む漆黒土で埋まっていた。また上面から40~50cm下がったあたりに面的に礫が広がっており、この下部は上部より明るい、ローム混じりの黒褐色土であった。底は平らで、壁はやや張り気味ではあるがほぼ垂直に立ち上がる。礫の凹凸は激しいものの、綺麗な桶状の穴。貯蔵穴であろう。

遺物は土器片が多かった。九兵衛尾根式、新造式、藤内式など中期前葉から中葉の土器片も混じっていたが、主体は曾利Ⅲ式である。11号と同一個体と思われる深鉢の小破片も含まれており、同時期のものである可能性が高い。

17号小豎穴

18号に隣接し、南東側は、今年度の発掘境界ギリギリにかかっていた。底は平らで固くしまった盤状の穴。18号同様、中程に礫があり、ローム混じりの暗褐色土で埋まっていた。

遺物はそれほど多くない。曾利Ⅲ式の深鉢片が数点出土している。

3号住居址に近い10号は住居と同じ新造期のものであるが、遺物の出土のない穴を除けば多くが曾利Ⅲ期に属するとみてよさそうである。特に平成15・16年度調査区に近い一群は、かつて調査された小豎穴とともに、当該期の小豎穴群を構成するものだろう。

また14・15号、16・17号のように2基が対を成すかのようにあり、さらにその一方が深く、一方が浅いという点は興味深い。

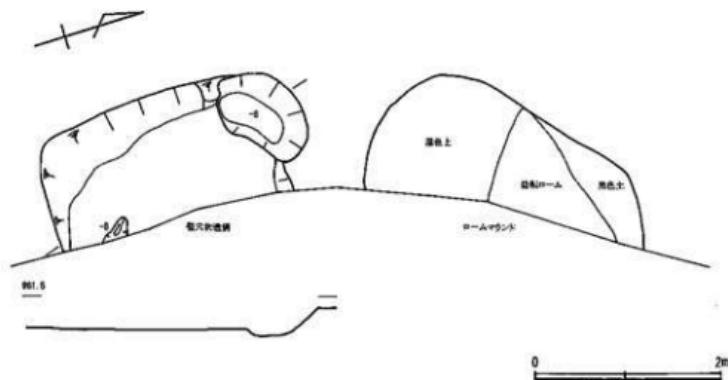
その他

3号住居址の南西で、黒色の落ち込みが検出された。調査を進めるにつれ一つは竪穴となつたが、底は軟弱で壁の立ち上がりも明瞭でなく、住居址とは思われなかつたため、竪穴状遺構とした。遺物は上面から黒曜石の微小剝片が一点見つかったのみである。

またこれに隣接してロームマウンドが一基確認された。(第9図)

小 結

今年度調査区においても、平成15年に調査された埋没沢が確認できた。この沢に近い尾根の頂部に3号住居址があり、さらに南に曾利Ⅲ式期を主とする小竪穴群があつた。過去の調査で知られていた小竪穴と一つのまとまりとしてとらえることができる。



第9図 竪穴状遺構・ロームマウンド (1:60)

御所平北遺跡

御所平北遺跡では、住居址、小堅穴などの遺構は確認できなかった。これは今回の調査区が御所平北遺跡の東端、御所平遺跡との境となる沢にほぼあたっていたためである。このため、御所平北遺跡では蛇行する沢や、集落の広がる台地から押し出された砂利層の調査に終始することとなった。

沢1

当初、黒色の上面より灰釉陶器片が出土したため、平安時代の住居址であると想定、調査を進めた。縄文土器や黒曜石の石鏃、水晶の剝片が出土するに及んで縄文時代の住居址かとも思われたが、掘り進めるにしたがって砂利が多くなり、礫混じりの地山に到達してしまった。土層の観察から堆積しているのは氾濫により押し出された砂利層であることが判明。またあたかも堅穴のように落ち込んでいるが、水によってえぐられたものと考えられることから、これは沢の屈曲部であると結論付けた。

沢2

沢1の北東、調査区境に沿うように埋没沢が二箇所顕を出した。いずれも粒の細かい黒色の砂利混じり土で、よく締まっており固い。この砂利層中に縄文から平安の遺物が含まれている。

沢2は沢1から8mほど北東に落ち込みのように検出された。少し周辺を広げてみたが、住居など遺構になるとは思われなかった。掘りはじめてすぐに礫混じりの地山層に達し、底も壁も遺構のそれとは大きく異なり、凹凸が激しいことから、流路であると判断、沢2とした。

沢3

沢2からさらに15mほど北東で、もう一箇所、同様の黒色土の落ち込みを確認した。上面で平安時代後期の須恵器片が出土したため同時期の住居の可能性もあるとみて調査区を一部拡張したが、この黒色土は調査区に沿って延々と続いていることがわかり、沢1・2と同様の沢であると判断した。

なお、沢には便宜上番号を付したが、沢1から3は埋まっている土がまったく同じことから、同一の流路である可能性が高い。

砂利層1

沢のように流路となる落ち込みが見られず、広く堆積しているものを、砂利層として区別することにした。この砂利層は砂礫の粒径に差があるものの、褐色でロームが混じり、沢の埋まり土とは一見して異なる。黒色土が堆積していない場所、例えば雨で洗掘されたような場所を流れ運ばれた砂利の層であろう。

砂利層1は、礫混じり地山層の直上にあり、厚さは50~70cm。上部30cm厚は拇指の爪大から拳大のやや径の大きい礫層で、その下部がほとんど砂粒と言てもいいほど細粒の砂礫層である。所々にレンズ状の堆積もみとめられ、南の発掘境の近くは一部深くえぐれている。色はともに褐色。調査区の両側の壁に見られる断面のレベル差などから、南から流されてきた堆積層であることがわかった。

この砂利層には、遺物が多く含まれていた。縄文中期前葉の新造式から中期末・後期中葉の土器片と石器がある。南側、すなわち御所平遺跡跡から流れ込んでいることから、これらの遺物は御所平遺跡のものであることは疑いない。未発掘地区には、当該期の遺構が存在するものと推察される。またその量の多さから、遺構密度もそれなりに高いと思われる。

砂利層2

砂利層1より暗い黒褐色土で、小礫や遺物の混入は少ない。また、遺物は砂利層の上層に比較的多く混じっている。

遺物の時期は多様だが、中期後葉の曾利IV式、唐草文系、後期の堀之内式が目立つ。

砂利層3

直径5mmから赤ん坊の拳大程の小礫が多く混じっている。色は砂利層1によく似て2よりは明るい。層の厚さは30~40cmあり、1よりも土の比率が高い。下部は拳大から掌大の礫が多く混じる。

遺物は砂利層1・2同様、各時期あるが、2に比べると中期前葉から中葉の新造・藤内式など古手のものが目立つ。またわずかながら前期の諸磯c式、中期初頭の九兵衛尾根式の破片もみられたほか、石鏃、石鋤など石器も多かった。

砂利層2・3は観察により、西側、御所平北遺跡から流れ込んだものである。また砂利層3の上に堆積していたやや色の暗い砂利層が2とよく似ていることから、これが同一層だとすれば、2は3より後に押し出されたものとも考えられる。いずれにしてもその豊富な遺物からは西の台地上に広がる遺跡本体の内容をうかがい知ることができるだろう。

小 結

御所平北の調査区は、ほぼ全城が両遺跡を分かつ谷状の地形の中であり、沢や砂利層以外は遺構を確認することは出来なかった。しかしながら沢や、両遺跡から押し出された砂利層には縄文前期末から後期、平安時代の遺物が多量に含まれており、両遺跡が沢を挟んで対峙すること、そしてそのいずれもが長期にわたって営まれた集落であることを知ることができた。

3 まとめと考察

昭和46年に最初の発掘調査が行われて以来、御所平・御所平北の両遺跡では県営事業に先立ち断続的に合計五回の発掘調査が行われている。それぞれが道路幅のみの調査であるため、遺跡全体からみれば長いトレンチを縦横に入れた形になり、遺跡の範囲や内容、集落の様子などが知られることとなった。特に平成15年度には最大幅9m近い埋没沢と氾濫流路を検出している。周辺の状況からここを山地形でみると両遺跡の境とし、これより南東を御所平、北西を御所平北としている。(第3図)

今年度の調査では、南側の御所平遺跡で住居址や小堅穴を発掘したが、北側の御所平北遺跡では沢や砂利層を確認するにとどまった。しかしながら沢や砂利層に混入した豊富な遺物は、両遺跡、とりわけ御所平北遺跡の内容を知るうえで大きな手掛かりとなることが期待される。そこでこの遺物を包含する砂利層を理解・考察するため、これまでの調査内容を振り返る必要がある。

御所平遺跡

平成15・16年度の調査により、平安時代の住居址2軒、小堅穴9基のほか、単独土器1箇所が調査されている。

平安の第1号住居址は、昭和46年に調査された住居である。平成15年度の発掘により本址には新旧2時期あることがわかった。旧住居は10世紀前半から中頃、新住居が10世紀後半である。

第2号住居址は、前年に調査された1号址から直線距離で約150m離れている。当該期の住居址は数mから數十mの間隔をおいて点在する傾向があり、間には墓壙とみられる小堅穴も発掘されていることから、おそらくこの2軒の間にも数軒の住居址が埋もれていると思われる。

今年度調査区に近いところでは、縄文中期後葉・曾利Ⅲ式期の盤状の小堅穴が3基調査されている。

また、縄文中期前葉新道式の深鉢1個体分と有孔鍔付土器の破片がつぶれた状態で見つかっている。穴などは伴っていないかったが、このような土器の出土状況は、周辺に当該期の住居址が存在することを推測させるものであった。

小堅穴の中には、中期初頭の九兵衛尾根式の土器片が出土したものがある。この西側が南東向きの緩斜面になっており、当該期の住居の立地としては好適である。

御所平北遺跡

御所平北では縄文時代中期中葉の住居址2軒、後葉の住居址が3軒、後期の住居址が1軒のほか、小豊穴11基が発掘された。それぞれ藤内式の古段階、藤内II式、曾利II式、曾利III式、曾利III～IV式、堀之内式期であり、集落が長期にわたって継続していた可能性をうかがわせるものとなった。

また小豊穴のうち1基は弥生時代中期の集石墓と考えられるものであった。富士見町においては弥生時代の遺構の調査例はほとんどなく、もちろん同様の遺構も前例がない。

第4号住居址

4・5・6号住居址は御所平北遺跡の北西縁に位置する。うち最も西よりの4号住は表土除去段階から土器片が多く出土し、住居の存在が明らかとなった。上層より土器が出土するため残しながら下り、復元できないものも多かったが29個体分の土器が出土した。(第13図)

土器の入っている層は比較的柔らかい炭混じりの黒褐色土だが、遺物の下、床までの数cmは炭、ローム粒、小礫混じりでジャリジャリと固く締まった暗褐色土。特に西側はローム塊混じりで、故意に埋められたようだった。

床は平らで固いが、踏みしめられているというほどではない。主柱は1・2・3・4・6の5本で深い。炉は石と土器片で組まれている。3個の石のうち1個は安山岩、土器片は一つが藤内式のみづち文、との2個は同一個体の新道式の深鉢口縁部である。

第5号住居址

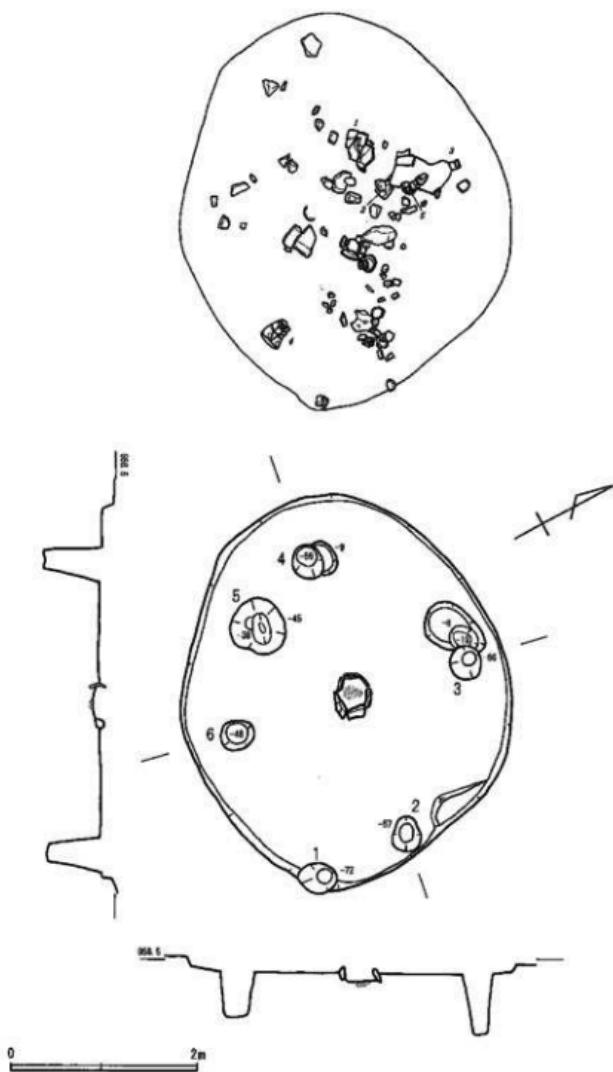
表土を除去していると小型の土器の口縁が現れた。調査を進めると、近くから後期堀之内式の深鉢が正位でみつかり、周辺が黒褐色の落ち込みであったため、当該期の住居だと思われた。しかし床面近くまで削除が進むと、遺構の様子から曾利期の住居址であることが判明した。

床は平らで入り口となる南側が特に固く締まった床となっており、一部は低くなっている。主柱は1・2・3・4で、中央奥壁よりにががある。石圓いの石は東の一つを除いて抜かれていた。炉床は良く焼けていて固い。また北東隅に、当初確認できた小型の埋設土器がある。

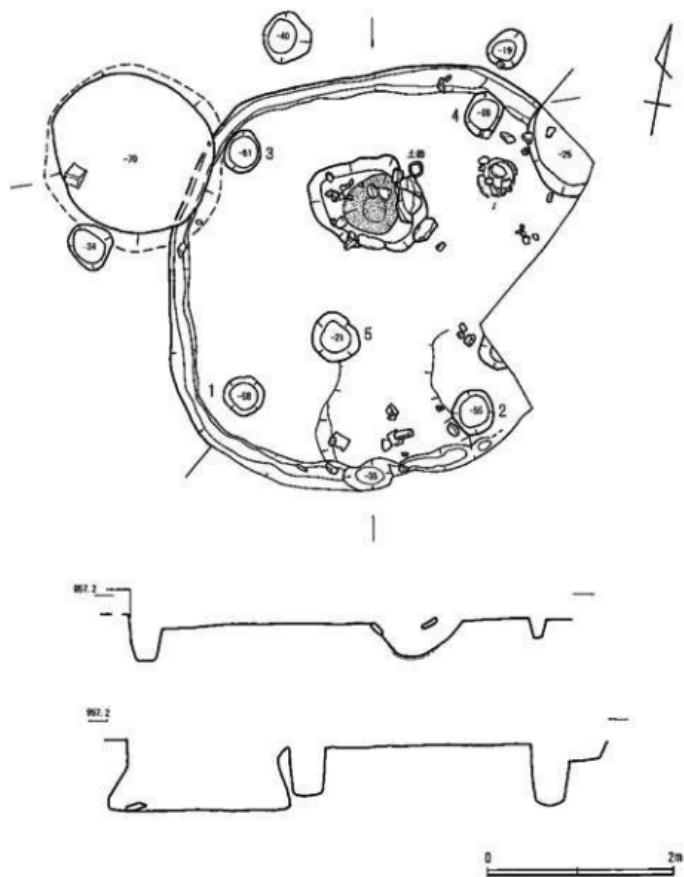
住居の北東と北西の隅を小豊穴が切っている。北西隅のそれはフ拉斯コ状で底は平ら。貯蔵穴であろう。これらは後期のものと考えられ、堀之内式の深鉢もこれに伴うと考えられる。

第6号住居址

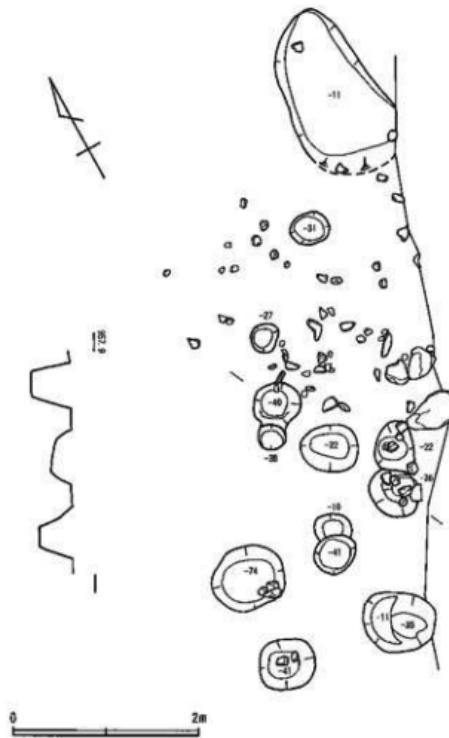
4・5号住居址の中間に、疊群と堀之内式の注口土器片が見つかった。疊と、炭・ローム混じりの黒褐色土を除去すると、しまりはないものの褐色土とロームが斑になった平らな面がみられた。柱穴状の穴が連続していたことから後期の住居址と考えた。壁の立ち上がりは検出できなかったが、床面の状況から掘り込まれていた可能性がある。



第10図 第4号住居址 (1:60)

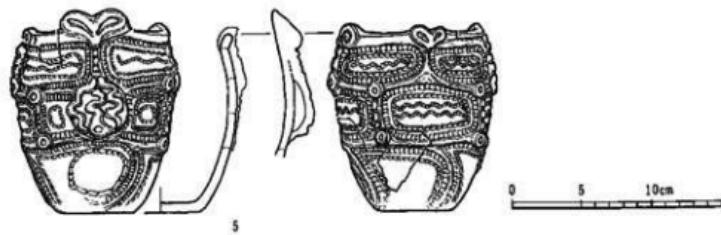
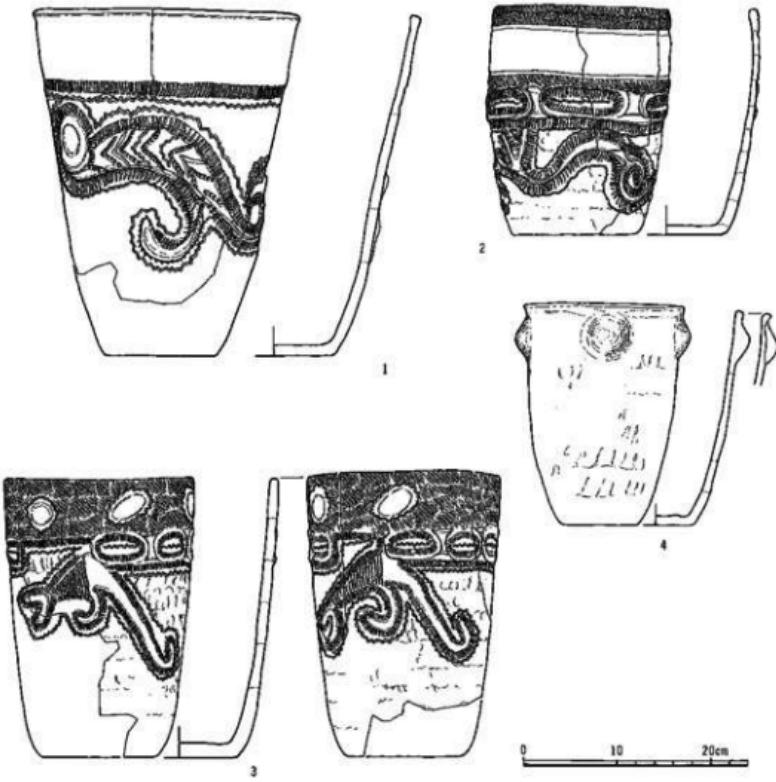


第11図 第5号住居址 (1:60)



第12図 第6号住居址 (1:60)

両遺跡とともに、縄文中期から後期、弥生中期、平安時代と複数の時期に集落が営まれている。また広い範囲に遺構が存在することが知られた。今年度調査区に流れ込んでいる豊富な遺物は、このような両遺跡の調査状況からも理解することができる。



第13図 第4号住居址出土の土器 (1~4 : 1/6 5 : 1/4)

御所平・御所平北遺跡とその周辺

農道の改修工事であるため、幅約3m、総延長は約235mという極端に細長い調査区での発掘となった。限られた範囲に加え、地形的な制約も多かったが、御所平第3号住居址をはじめ小堅穴などを調査し、両遺跡の間の埋没沢を確認できたことで、あらためてこの遺跡の集落の広がりや内容を知る、多くの手掛かりを得ることができた。

両遺跡のあり方と集落構造

平成15年の調査区の北東で、御所平と御所平北を分かつ埋没沢の続きを確認できた。これにより、御所“平”的名のごとく平らな台地状でも、かつては沢に区切られた尾根であったことを知ることができた。西の御所平北は比較的広いが、東の御所平側は思いのほか痩せ尾根で、南東向きの緩斜面に集落が展開している可能性もある。

全体としてみれば御所平と御所平北は、沢を挟んで対峙する二つの集落であり、このあり方は、井戸尻と曾利、居平と唐渡宮など、八ヶ岳山麓の井戸尻遺跡群の集落のあり方と全く同じであるということができる。

過去の調査結果もふまえて考えると、両遺跡はほぼ全面に集落が広がっていると考えてよいかもしれない。時期ごとのまとまりは不明だが、とくに今年度は中期後葉、曾利Ⅲ式期を中心とする小堅穴群の一隅を調査することができた。周辺から当該期の土器片も多く出土していることから、住居址も付近にあることが予想される。

入笠山麓の拠点集落

御所平北の調査区で確認された沢や砂利層に含まれる遺物は、両遺跡より押し出されたものだった。ここから縄文時代も前期末ごろから後期の中葉まで、断続的にではあるが、継続して集落が営まれている可能性が指摘された。これは近隣の入笠山麓の遺跡の中でも最も長く、また遺跡の範囲も広い。

平成15年調査区の、富士見では前例のない弥生中期の集石墓の存在は、この時期の生活痕が埋もれている可能性を示している。

さらに平安時代の集落は、峠を越えて伊那側に抜ける古道の入り口に位置することもあり、八ヶ岳西南麓に展開する平安集落との関係も考え合わせると、歴史的にも重要な意味を持つのではないだろうか。

今回の発掘調査においては、御射山神戸Ⅳ、栗生集落組合、地権者の皆様ならびに日頃より道路を利用している方々にはひとかたならぬご協力をいただきました。文末ながら記して感謝の意を表します。

写真図版1



遺跡遠望（東より） 2010年1月撮影



遺跡遠景（北東より） 2010年2月撮影



手前：御所平北遺跡　奥：御所平遺跡（北西より）



調査風景（御所平遺跡）

写真図版 3



砂利層 1



両遺跡の境界となる埋没沢（中央）



御所平第3号住居址（南東より）



第3号住居址 埋堀炉

写真図版 5



10号小堅穴（南西より）



11号小堅穴（南西より）



12号小堅穴（北より）



13号小堅穴（西より）

写真図版 7



14号小堅穴：左 15号小堅穴：右（西より）



16号小堅穴：左 17号小堅穴：右（西より）



御所平北遺跡近景（北より）

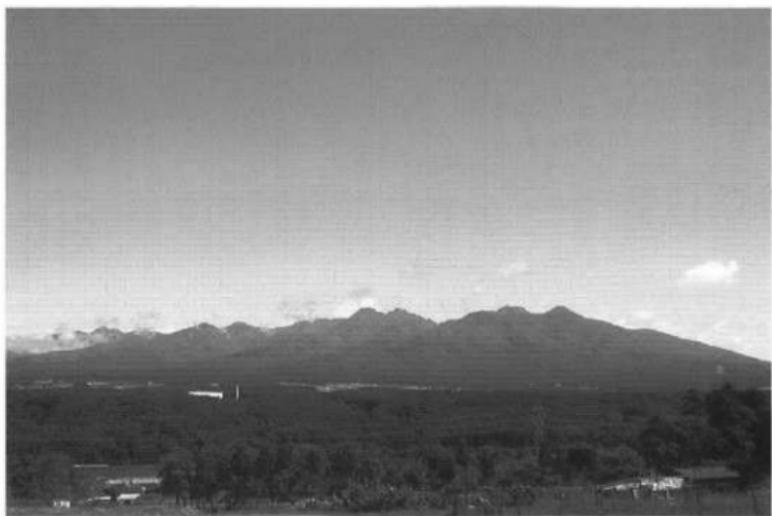


調査風景（北より）

写真図版 9



沢1(南より)



遺跡より八ヶ岳を望む

報告書抄録

ふりがな	ごしょだいらいせき・ごしょだいらきたいせき						
書名	御所平遺跡・御所平北遺跡						
副書名	平成21年度県営中山間総合整備事業御柱の里地区農道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	小松 駿史						
編集機関	長野県富士見町教育委員会						
所在地	〒399-0124 長野県諏訪郡富士見町落合10,777 TEL 0266-62-2400						
発行年月日	2010年3月15日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 度分秒	東経 度分秒	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
御所平	長野県 富士見町 富士見	203629	26	日本	日本	20090730 20090924	農道改良整備
				35度	138度		
				55分	12分		
				16秒	23秒		
				世界	世界		
				35度	138度	704	
				55分	12分		
				27秒	11秒		
				日本	日本		
				35度	138度		
55分	12分	25					
20秒	20秒						
世界	世界						
35度	138度						
55分	12分						
31秒	08秒						
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
御所平	集落	縄文時代 平安時代	堅穴住居址		土器 石器		
御所平北	集落		小堅穴 沢				
要約							
本遺跡は中山間総合整備事業の農道改良整備に先立って発掘調査された。御所平・御所平北遺跡という隣接する2遺跡の境となる沢を縫うような調査区であり、調査された遺構は当初予想より少なかった。							
御所平遺跡では縄文中期の住居址と小堅穴が調査され、集落の一隅を知ることができた。							
御所平北遺跡では沢や氾濫砂利層に含まれる豊富な遺物から、両遺跡の内容や継続時期を知るために手掛かりとなる情報を得ることができた。							

御所平遺跡・御所平北遺跡

平成21年度県営中山間総合整備事業御柱の里地区

農道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2010年3月15日

発行 富士見町教育委員会

印刷 ほおづき書籍㈱

長野市柳原2133-5

TEL(026)-244-0235
